
Eine Blume ist ein Garten zu bl?hen

篠宮 かおる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

E i n e B l u m e i s t e i n G a r t e n z u
b l ? h e n

【Nコード】

N 3 4 5 2 Y

【作者名】

篠宮 かおる

【あらすじ】

調子に乗って、お引越し作第二弾。
かなり加筆修正して、（する予定だし、しないとマズイ。）連載していきます。

他サイトからのお引越しです。
以下、あらすじになります。

私は全てを偽り、あなたの妻になります・・・――。

相手は16歳年上の若き青年伯爵。
偽りの幼き妻の片恋物語。

偽りの誓い（前書き）

本当に連載しても良いのでしょうか？

偽りの誓い

??これは、生き長らえる為の、神に叛く、偽りの誓い……。

蒼い海に悠然と浮かぶ五大大陸の内、一際文化や伝統が他の大陸より発展を遂げている、レイレーニア大陸。

そのレイレーニア大陸の国土の大半を占める『ルードベルク王国』が、今から始まる悲しみと偽りが交錯し、それでも愛を貫きを通した恋物語の舞台である……。

ルードベルク王国は王都・レナに本部を構える、聖シーシア大聖堂教会。

遙か昔、まだこのルードベルクが建国される以前より前に、その当時の人達が創ったと言われている、清楚な中に、華やかさと知性を感じさせる様式美を持つ最古の聖堂。

その大聖堂で結婚式を挙げるのが、結婚適齢期を迎えた年頃の少女達の夢であり、勿論、私もそれを本気で夢見ていた。

けれど。

大聖堂に厳かに朗々と響く司祭様の声を聴き、考え、思うことは、これから私がしようとしている、罪深くも恐ろしい偽りの誓いを立てる事。

頭では仕方のない事なのだと、やらなければならない事なのだと理解はしている。でも、どうしても私に残った最後の良心がそれを

許さず、受け入れる事が出来ない。

そうしている間にも、式は特別大きな問題なく、淡々と進んでいたようで、名前を呼ばれた事で、私は我に返った。

「ローザ・シンシア・・・？どうなさいました？」

ローザ・シンシア。それが今の私の名前。

司祭様の私の態度を訝しむ声と、隣と、この結婚事態を良く思わない人達からの冷たい視線。

それを見なくても感じてしまえるのは、私がずっと周囲の視線と機嫌を伺い、潜りぬけ、今日まで生きてきたから。

（もう、あと戻りしないって、あの日、決めた。）

きゅっと、きつく唇を噛み、萎え掛けていた野心を叱咤し、この日の為に、これからの生活の為に身に付けた、完璧な微笑みを顔に浮かべた。

「緊張なされていただけの様ですね。では、式を続けましょう。」

その言葉で、私は怪しまれていない事を知り、また、この結婚式に参列した多くの貴族の席からは、あからさまに私を侮蔑する声も届き、聞こえた。が、私はそれをあえて無視した。

最初から悪意や妬み、羨みからの誹りは覚悟していた。

私、『ローザ・シンシア』の結婚相手は、このルードベルク王国を古くから支え、かつては王妃を輩出した事もある名門貴族の嫡出

嫡男の、クライス・デイル・ハーネストⅡエディエス様、27歳。

彼は13家もある伯爵の中で、唯一領地を黒字経営している伯爵家の跡継ぎと言っただけあって、彼、否、彼の家『エディエス伯爵家』と、縁続きになりたいと思っている貴族は多くいる。

そんな彼等からしてみれば、小娘でしかない私は疎まれ、邪険にされても仕方がないし、無理もない。

ヴェールが捲られ、冷たい唇が私の右頬に落ちてくる。

参列した人達から見れば、唇にしているように見えるこの口付けは、この儀式を司っている司祭様から見れば、愛の感じられない、冷たいものだっただろう。

後年、彼はこの日の事を、教皇録に事細かく書き記している。

——あの二人の間に、愛は無く、偽りと野心に満ち、冷たいものだった。

しかし、私はそれを止める事は出来なかった。

政治の世界に腐敗が広がり、蔓延しそうだった当時、私は当時の司教様に逆らえなかった。

彼女は孤独であり、公正であり、強く、弱い、守られるべき少女だった。

私にもっと勇氣があり、立ち向かう力さえあれば、未来は違っていただろう。

だが、過去はもう変えられない。

彼らはあの日、偽りではあるが、確かに永久の愛を、無償の愛を誓ったのだから……。

——教皇録・ミケイラ・ルスク『過去の過ちの日々』より??。

その後、式は肅々と進み、親族と仲間内だけのパーティーになり、あの人の周りにはここぞとばかりに人が集まってきたけれど、私の周りには、彼の妹以外来なかった。

「おめでとう、お兄様。??お義姉様、これからよろしく願いますわ。」

ピリリとした空気に、心から祝福されていない事が判る。

「おめでとう、クライス。これで君も今日から妻帯者の仲間入りだ。」

皮肉交じりにもお祝いに駆けつけてくるのは、彼の友人知人ばかりで、中には華やかな令嬢もいるけど、私の知り合いは誰もいない。『ローザ・シンシア』の親も、式が終わるなり帰ってしまった。

（私は、いなくてもよさそう・・・。）

逆にいない方が良いし、盛り上がるだろう。

直感に従い、楽しそうに団欒する彼等の傍を離れ、私は誰もいない大聖堂の中へと戻り、祭壇の前で跪いた。

謝れば、懺悔すれば、全てが赦される事ではない事は解っている。それでも私には、祈り、赦しを乞う事しか出来ない。

たった一ヶ月前まで、貧民街の孤児の一員でしかなかった私が、今、こうして貴族の令嬢として、偽りの身分で存在している事を。

そうだったのには、私の容姿に関係がある。

白金色の、艶やかで長く、豊かな髪に、董色の瞳。そして、顔が本来エディエス家の花嫁となる筈だった令嬢、『ローズ・シンシア』様に似ていたから。

ローザ様本人は、結婚が決まっていたにも関わらず、婚約者以外の男性との間に、戯れのつもりで結んだ肉体関係の末、子供を孕んでしまった。

国民の多くがタームル教徒であるルドベルクでは、如何なる身分の者も、身分関係なく、芽生えた命を摘み取る事は、王家への反逆罪と等しい罪状に課せられる。

せめて、身長さえ年齢に相応しく、それなりに低ければ結果は違っていただろう。なのに、私はどういうわけか、年齢の割に身長があり、そのご令嬢に酷似していた。

それ故に私はただ似ているというだけで、一ヶ月で『ローザ・シンシア』と言う貴族令嬢の身代わりとなり、聖女と神様に偽りの誓いを立てた。

自然と純銀製の十字架を握り合せる両手に、力が入る。床に就いた膝も、決して寒さからだけではない罪深さから、ぶるぶると震える。

一心に祈り、赦しを乞うのは、それだけ恐ろしいから。

「どうか、お許し下さい。」

私が今日、これからやろうとしている事は、国家の転覆をも恐れぬ、天下の大罪。

せめてもの救いは、期間が定まっている事。

——良いか、一年だ。一年、娘としてあの家にいてくれれば、お前の今後の生活は保障してやる・・・。

濁り、淀んだ瞳に浮かぶ狂気に、ほの暗い雰囲気。

野心家とは、あんな人の事を言うのだと、私はあの時初めて理解した。

生きていく為に、貧困からくる飢えから逃れるために交わした契約。

（後悔、しない。）

十字架を握り直し、私は祈った。

「どうか、罪深い私を御守り下さい。」

私は、知らなかった。

この決断が自分自身を苦しめ、悩ませる事になるだろうという事を。

私は、自分より年上の妹が呼びに来るまで、聖女に祈り続けていた。

偽りの誓い（後書き）

次回は、気長にお待ち下さい。

偽りの領地へ？（前書き）

更新しました。

偽りの領地へ？

——人は人を簡単に信じ、裏切り、勝手に期待しては絶望し、逆恨みする身勝手極まりない生物である。——

（『貴族社会の裏と真実』著／ファイシス・レクニール より）

重たい空気と、肌に慣れない高級な寝具。そして何より厭わしい他人の匂いが、自分の身体から香る事で、浅い眠りから現実の世界へと、簡単に引き戻される。

「お目覚めでございますか」

薄い瞼を何度か瞬きを繰り返し、ベッドの上で上半身を起こせば、気配もなく一人の侍女が、ぬるま湯を張った洗面具の乗せたカートを押しながら現れ、両手で柔らかいリネンを渡してくる。

「ええ。おはよう。シュリ。」

彼女——シュリは、私が唯一シンシア家から連れてきた侍女で、他の人より浮き離れた雰囲気を持ち、淡々とした物言いと性格から、シンシア家では忌避されていた。

「奥様、ご朝食は如何なされますか。」

「パンとスープだけで良いわ。」

「では、そのように。」

適温に冷まされたお湯で顔を洗うのは気持ち良い。顔を洗いながらシユリの問いに答えると、シユリは音もなく部屋から出ていき、すぐにホカホカの焼きたてのパンと、作りたての熱いスープが注がれたスープ皿の二つを持ち、部屋に戻ってきた。

そのスープとパンが載せられたワゴンの下には、いくつかの贈り物と、手紙が積まれていた。

今日で結婚して3日目の朝。

そろそろ見返りを求めた賄賂紛いの贈り物が届き始める頃だと、あの家で教わった。そう言ったモノは、全て横流しするように言われている。

（何処まで浅ましいの・・・。）

感じるのは、醜い浅ましさと強欲さに対する嫌悪感。

顔を洗い、化粧を完全に施し終えた私は、シユリしか傍にいないことを良い事に、行儀悪くも、贈り物に付いてきた手紙に目を通しながら、パンを食べ、スープでそれを流し込んだ。

そして何通目かの手紙に差し掛かった時、私の目は、驚愕により見開かれた。

その手紙の文字は、お世辞にも上手いとは言えない文字だったけれど、書かれている内容は一刻も争う内容だった。

ぐしゃりと、無意識に手紙を握る手に力を入れていたのか、手紙が音を立てて鳴った。

私の董色の瞳は忙しく文面を走り、唇は強い憤りからふるふると震えていた。

今、私が目を通しているのは、エディエス伯爵家に恨みを込めた決死の嘆願書。

作物が不作だと言うのに納める税金は年々上がるばかりで、また、仕事をしなくても橋作りや道の舗装と言った賦役が多く、生活がままならない。このままでは死んでしまう・・・。

この国では現在、直接領主に意見を言うのは固く禁じられていて、時には領主、ひいては貴族や国王に逆らい、歯向かったとして、斬首か縛り首、火刑に処せられる。

そこまでの危険を知りつつ、冒してでも届けられ、出され、助けを求め、伸ばされた手紙と願い。

これが真実なのならば、このエディエス伯爵家が持ち、経営している領地は黒字ではなく赤字。

（酷い、良くもこんな嘘を・・・！！）

あまりにも酷い、今現在の領地の現状を訴える嘆願書に、私は傍にいるシュリではない使用人を呼ぶ為、呼び鈴を激しく振り鳴らした。

チリンチリン、と、いくら鈴を鳴らしても、すぐ部屋に駆けつけるほど、まだ朝は明けていないし、使用人の動きも早くない。

こうして待っている間にも、領地では何も罪がない子供たちの命の灯が消えかかっているかもしれない。

「――シュリ。」

「はい。お預致します」

私が何も言わなくても、シュリは理解してくれる。

シュリは、今まで私が読んでいた手紙兼嘆願書を私から受け取ると、手荷物の鞆に入れ、大きな鞆には下着の代えやアクセサリー、靴からドレスまで、身の回りの物を手早く詰め込んだ。

それが済んだと同時に、使用人が私に宛がわれた部屋の扉を三回ノックし、開けた。

偽りの領地へ？（後書き）

変なところですけど、区切ります。

あちらではいなかった人を、一人増やしました。

偽りの領地へ？（前書き）

久々です。

偽りの領地へ？

これから私は大博打を仕掛ける。
失敗すれば、勿論命はない。

「お呼びでしょうか、ローザ様。」

無論、用事があるからあるから呼んだのだ。
用事がなければ、誰も呼んだりはしない。
そんな事も解らないのだろうか。

（まあ、構ってられないから一言言わないけど。）

さて、どう切り出そうかと思ったが、ここはストレートに攻めて
みようと思ひ、にっこりと無知な微笑みを浮かべ、首を少し傾げた。

「私、イルファードルに行きたいの。あちらの庭はたいそう美しい
のでしょうか？」

頭が悪いご令嬢ならば言いそうな言葉を駆使し、怪しまれないよ
うに使用人の下手に出る。

普通、嫁い出来た人間に対し、名前では呼ばない。

名前で呼ぶという事は、嫁として、この家の一員として、認めて
いないという事になる。
ならば。

（私がいなくても良いという事。むしろ、いなくなつて欲しいと言

った方が早いかしら・・・？)

「私とここにいるシュリだけを送って下さらないかしら。旦那様は私の好きなように過ごして良いと仰って下さったし。何より私、あまり社交界が身体に合わなくて・・・。」

これは真っ赤な嘘だ。

本物の『ローザ』は社交界が大好きで、大層な阿婆擦らしい。

私の演技に、シュリの右眉がピクリと動くのが分かった。

あまりのウソについつい反応してしまったのだろう。

でも今は構ってられない。

とりあえず今は、彼の地へ行くことが先決なのだから。

でも、ふと気付く。

どうして私はここまで必死になっているのだろうか、と。

必死になった所で未来は変わらないかもしれないのに。

(それでも、私は・・・。)

瞳を閉じれば、今でも思い出す、あの人の言葉。

——優しいね、君は。

優しくて賢い。

それ故に、君は辛くても過酷でもその道しか選べない。

そしてそんな自分の人生も恨めないし、憎めない、異を唱える事も出来ないんだよね……。――

黙って貧民街を出る前日、悲しい色を瞳に宿した男性に言われた言葉。

あの人には本当にお世話になった。

なのに別れの言葉も伝えずに別れてきてしまった。

今、こうして貴族らしく振る舞えるのはあの人のお陰でもあるのに。

（元気がしら……。）

同じ董色の瞳を持つあの男性が気になって仕方がない。

きっと今もたった一人の大切な女性を捜している事だろう。

その女性を捜しながら、身寄りのない私に優しく接してくれた人。

字の読み書きから計算、気が付けば政治学社交学、果ては敵国などの諸外国の事等、ありとあらゆる事を私に教え込んでくれた。

君は、私を愛し、支えてくれた大切な人に似ているから、と。

（ああ、だからなのね。）

私がこんなにも必死になるのは。

ふっと、口には自然と勝ち誇った、傲慢な令嬢の笑みが浮かんでいた。

（私はあの人の為にも、領地を立て直して見せる。）

気付けば、ゆっくりと呼吸を整え、私は凄絶な笑みを浮かべ、伯爵夫人として使用人に命じていた。

これが私が人に対し、初めて命令した瞬間だった。

偽りの領地へ？（前書き）

さて、どうしたものか。

偽りの領地へ？

ガタガタと、整備されていない道をひたすら走る質素な馬車。

あの突然の私の命令から数刻後、私は質素と言うよりかは、簡素な馬車の乗客となり、劣悪な道の上で揺られていた。

エディエス家の所領地イルファドールは、王都レナから距離で言えば、馬車で10日程かかる所にある。

それ故に、一度領地に引込んでしまつては、最新の王都の情報は入つてはこないが、逆に言えば正体がばれる危険性も減り、要らない詮索もされずに済むと思ひ当たり、内心で喜べたのはほんの僅かだった。

『どうしても行くと仰るの？ローズ。』

『君は私達が嫌いなのかね？』

『そうよ、お姉様。どうしてもイルファドールになんて……。』

私が領地に連れて行く事を命じたのを何処で聞きつけたのか、仮初の家族は私を引き留めようとした。

その家族の引き留めようとする瞳には、一種の焦りにも似た光が宿っていて、私はそれを見て、ますます行かなければならないと思つた。

『嫌いだなんて・・・、そんな事はありませんわ?』

『なら、どうして・・・。』

泣き縋る家族に偽りの笑みを浮かべた顔を向け、私は殊更それらしく言葉を紡いだ。

『私、結婚後はその家に尽くすと決めていたんです。だから、行かせて下さいな。私の我儘は聞いてはもらえませんか?』

全てを偽れば、その後で苦しくなる。
だから、少しの真実と嘘を混ぜて。

私の演技は完璧だったはずだった。

お金の掛る社交界より、領地へ行きたい。
家族は愛してるけど、だからこそ、その家族をもっと好きになるように領地に行ってみたい。

少しの我儘と、如何にも無知そうな微笑み。

その笑顔に絆されたのか、僅かな逡巡の後、仕方なさそうに仮初の家族達は、私を漸く引き留める事を諦めてくれた。

これで良い、これで彼の地へ行けると、安堵していた私に、あの人はならば、と、交換条件を付けてきた。

「何をお考えですか、ローザ様」

淡々とした、色のない声に私は己の思考から舞い戻り、微笑みを浮かべた。

「いいえ？何も考えてなかったわ。そうね、強いて上げるのなら、お庭の事かしら。」

本当はお前の事だと、喉まで言葉がせり上がってきていた。

（私は信用されてないのか・・・。）

当然だろう。

私はあくまであの家の人間から見れば他家の娘で、政略結婚で嫁いできた娘。

目の前にいる侍女を連れて行かなければ、領地に行くことは認められないと言った伯爵家の家族の言葉に、私は仕方なくその条件を呑むしかなかった。

が。

「本当にそれだけでございますか？」

私の偽りの思考に気付いたのだろうか、彼女は偽りを許さない、真実を見抜こうと、私をその冷めた瞳で見つめてくる。

（やりづらい。）

彼女は優秀だった。シュリには及ばないが、それでもかなり優秀なのは認めざるを得ない。

（惜しいな。）

違う出会い方でさえあれば、彼女も自分の手駒に、シュリのように引き込めただろうに。

相手の呼吸、身体の動き、視線の配り方。
間諜にはもってこいの逸材だった。

これで自分やシュリの様な人間であれば、躊躇い無くこちらの世界に引き込めただろう。

偽りと、血に塗れた、混沌とした闇の世界。

けれど、彼女は正真正銘の貴族生まれの娘で、行儀見習いのメイド。
私とシュリの住んでいる世界では三日として生きては行けない。

あの人は、時には優しさを忘れ、残酷になる時も、なる事も必要だと私に説いていた。

でも残酷になれるかどうかは、相手の人柄による。

信用できる相手なら残酷にもなれる。

憎くもあれば残酷にでも、悪にでも、鬼でもなんでもなれる。

けど。

（不合格。）

私の心の声がそう呟き、彼女をそう判じた。

彼女は駒にはなり得ない。と。

それからには特に私と彼女の間に会話はなく、話す事もなく、馬車は必要最低限の休息をとりつつ、順調にイルファードールに向かいひたすら走りぬけた。

そして、もう少しで領地と言う所で、私はこの地にて、初めての友と出逢い、信用に足る盟友に巡り合った。

おりしもその人物は、傷を負った獅子だった。

偽りの領地へ？（後書き）

最後に出てきた人が誰か解る人は、モバスぺ出身のありがたいファンですね。

さて、次回はどうやって話を続けようかな。

偽りの領地？（前書き）

急がばまわれ？

偽りの領地？

怒りや憎悪、悲しみや苦しみ。

それらの負の感情は何も生み出さない。

否、それらはやがて争いや破滅を引き起こす種となる・・・。

領主館には予定より三日早い、七日で到着した。

その途中で思わぬ『拾いモノ』はしたが、それはそれとして、自分にとっては大きな収穫になったので、特に大きな問題にはならない。

「ここがあのかの【イルファドル】なのね。」

「そのようです。奥様、あちらを。」

私の独り言にシュリが相槌を打ちながら物見窓のカーテンをサッと曳けば、その窓から外の様子が窺えた。

外は冷たい雨が降り、風は葉を巻き上げ、春の嵐を予想させる天候。

「暴動ね・・・、一歩遅かったようだね。」

「仕方がありません。この家は恨まれて当然にございますから。」

「そうね。——ここで停めて頂戴。降りるわよ、シュリ。」

そう言つて私が馬車を止めさせたのは、領主館前の鉄の腐食しかけた門扉前。

その領主館前には、農具を武器とした領民衆が大挙して押し寄せていた。

「お辞め下さい、危険です。」

馬車の扉を開け、今にも降りようとしていた私とシュリを引き留めたのは、あの使えない侍女こと・マーヤ、20歳だった。

（本当に使えない。）

溜息が出てしまつても仕方がないだろう。

今、この暴動を止めなければこの先がどうなつてしまふのか判らないのだろうか。

今にもこちらに襲いかかつてきそうな民衆の瞳は、強い怒りと、憤り、恨みの焰で燃えているというのに。

私はこの侍女、——マーヤより民を選ぶ事に決め、恐怖で怯えている彼女を一人馬車に残し、シュリと馬車を降りた。

私が馬車から降りた途端、目を暗い闇に淀ませ、言葉にもならない奇声や雄たけびを上げ襲いかかってくる人々。

私が普通の貴族令嬢だったのなら、その気迫に怯え、腰を抜かし、そのまま殺されていただろう。

でも、私は違う。

ひた、と、襲いかかってくる人達の顔を見つめ、背筋を伸ばす。
そして。

「大変、長らくお待ち致しました。私は本日これより、このイル
ファードールの新たしき領主に命じられた、エディエス家第12代伯
爵夫人・ローザ・シンシアと申します。あなた方の嘆願書・願いの
籠った切実な言の葉は、読まさせて頂きました。」

さほど大きくもない私の声は、雨音に負ける事無く、聖堂の鐘の
ように朗々と響き渡る。

私の声が、聞こえているか、届いているかは解らない。
けれど、私は止めてみせると決めていた。

「もう良いのです。耐えなくても良いのです。ひもじさに負け、子
供を売る事も、殺す事もなく、ただただ普通の幸せを。今こそ、あ
なた方の手に戻しましょう、人としての権利と幸福を。前領主は私
が裁きます。」

あなた方の手やそれらを汚す事はありません。価値もありません。」

断固たる言葉は、人の胸を撃ち、時には何万もの民衆をも操る。

事実、私の演説を聞いた幾人かが武器を振りおろし、顔を寄せ合
い、相談をしているかと思いきや、私の方へと、警戒しながら近づ
いてきた。

ここで警戒心を完全に解除したのならば、逆に救いようがなかつ
ただろう。

元の生活を取り戻すには、多少なりの警戒心は必要だ。

（これなら大丈夫かもしれない。）

警戒心はあるが、話し合いも出来る。

理性が残っているのならば、これ以上の悲劇は起きないだろう。

私の後ろにはシュリと、有能すぎるが使えないマーヤ、そのマーヤを乗せた馬車と、『拾いモノ』が乗っている馬車が2台。

無意識の内に勝手に震えてくる心と身体を叱咤し、ゆっくりと歩みよってきた人物の顔を真正面から迎え撃つ。

こんな時、不思議と思いだされるのは、やっぱりあの人の言葉。

—— 良いかい？ 人の上に立つ時が来たのなら、私情は捨てるんだよ？ 政治に私情を反映させては、混乱を招く。時には血を流すのも大切だからね……。

君にはそうなって欲しくないけどね、と、薄く淡く微笑んだあの人。

（ごめんなさい。）

私はその人に心の中で謝罪し、覚悟を決めた。

（私は、エディエス伯爵家の嫁、ローザ・シンシア。）

もう、あの時の私はいない。

「前領主は速やかに裁きます。が、殺しはしません。」

「何故だ、あいつらのせいで俺達の家族は死んだ、苦しんだ。それなのに、」

「殺してしまつては、つまらないではないですか。」

男の言葉を途中で止め、私は残忍な笑みを浮かべ、ほほほ、と、軽く笑った。

その私の態度と言動に、私と話し合いをする為に代表で進み出てきていた、数人の男達の顔色がサツと変わった。

「殺して楽になどさせてなるものですか。苦しみには苦しみを。これが私の理念です。ですから」

手をシュリの方へと伸ばし、シュリが持つて降りた、細身の長剣を受け取り、領主館からこそと抜け出そうとしていた、いかにも怪しげな侍女の脚に向け投げ、命中させ、更に笑みを深めてから何事もなかったかのように忠告した。

「私の理念に叛いた時は、ああなるでしょうね？」

裏切れば自分がどうなる事かを、残酷なまでの天使の微笑みでもって教え込み、未だ苦しみ呻いていた侍女へ近づき、止めを刺す為に、脚に深く入り込んでいた長剣を引き抜いた。

「奥様、私が」

「そう？ならお願いね」

私がしようとしていた事を、シュリは表情も変えずに淡々と自分から引き受け、止めを刺した。

その瞬間、ブシュッと、血が噴き出し、私とシュリは血に濡れた。

その光景を目の当たりにした男達は、腰を抜き、その場で固まり、馬車から丁度降りてきていたマーヤは、顔色を蒼白を通り越し、土気色となり、ガタガタと震えていた。

（恨むのなら、自分の運命を恨み、呪うのね。）

私はそれに同情するでもなく、シュリを引き連れ、前領主を裁くべく、領主館の中へと入って行った。

偽りの領地？（後書き）

長いなあ。

偽りの領地？（前書き）

連続更新3日目？

偽りの領地？

私があの家から引き受けた仕事は、あの子の娘が出産が終わり、入れ替わる当日まで、貴族社会では当然とされている、無知で無学な令嬢を演じる事だった。

（もう、従ってはない、か。）

私は偽りを知り、この地の悲しみと闇を知ってしまった。
だから、もう知らない振りは出来ない。

無視する事も出来ない。

死ねと、見捨てる事も、絶る手を振り切る事も出来ない。

勝手かもしれない、領民達にとっては今以上の悲劇が待っている
かもしれない。

それでも。

（とんだ欺瞞だわ・・・。）

幸福を取り戻すと言っておきながら、幸せを与えて上げられない
かもしれないなんて、事情がどうあれこちら側の理由で、それを
守れなければ自分が口にした事は嘘となり、今度こそこの地は、破
滅を迎える為に、確実に闇に向かって走り出す。

領主館の中は、無駄に派手であり、華美だった。

いや、華美を通り越し、もはや領主館内は毒々しく、意味のない
装飾となり、倉庫の様だった。

「奥様、あの者はどうなされるおつもりですか？」

「あの者？」

「例の、捕虜にございます」

意味をなさない装飾がなされた館の廊下を歩きながら、執務室を目指していた私は、シユリの言葉にああと頷き、微笑んだ。

「命は盗らないよ？手なづければ良い駒になってくれそうだし、それに彼は本物の戦士だしね。」

「戦士、で、ございますか？」

「うん、戦士。彼は騎士と言うより、戦場でしか生きれない戦士。」

この地に入る直前、偶然拾った例の獅子。

獅子は連れ人と共に、私達が後少しでも遅ければ、息絶えていただろう。

見るからに異国の者だと分かる獅子の髪は赤く、瞳は紫が掛かった不思議な赤色。

一方連れ人の方は、何処の国の者かも定かではない、漆黒の絹のような手触りの美しい長い髪に、黒い瞳。

「もしかしたら、時渡りの娘かもね・・・」

「時渡りとは、例の時渡りでございますか？伝説の初代王妃の・・・」

「もしそうだったら、彼の連れ人は非常に利用価値が高いとは思わない？」

私が何を考えているのか一瞬思案しものの、それでもシユリは、持ち前の有能さを発揮して、私の意図を読み取ってくれた。

「では、」

「彼女は保護、若しくは監視下に置き、彼には国を裏切つて貰う。断つたら国に戻つて貰おうか……。あの国は荒れてるというのに・・。」

フッフ、と、私が笑えば、シユリは顔を顰めた。
だけどそれだけで、シユリは後は何も言わなかった。

それから執務室までは、お互いに無言だった。
そして、歩き続ける事、約五分。

「奥様、こちらです。」

「ああ、無駄にキラキラびしかった。行くわよ、シユリ。無駄口はここまで。」

「はい。奥様」

執務室の前に着いた私は、血のついた例の長剣をシユリから受け取り、扉を乱暴にバンッと開いた。

その先にいたのは、金貨をにやけた表情で数えた、年老いた男。

（腐っている、腐りきっている。）

冷静になりかけていた私の理性が、再び怒りに燃えていく。
その感情に任せ、私は金貨を数えていた男につかつかと歩みより、
血に濡れたレイピアを突き付けた。

そこで漸く私とシユリの存在に気付いた年老いた男。

その男は、金貨を数えていた手を止め、私を見上げた。
瞳には強い憤りと、野心が渦巻いていた。

「お前は誰だ」

ひび割れた声が、こんなにも疎ましいとは、この時まで知らなかった。

私はなるだけ不快に歪みゆく表情を何とか抑え、恐ろしいほどま
での声で、宣告した。

「お前は血を啜り過ぎた。」

レイピアの切っ先が、年老いた男の首の肉に喰い込んでいく。
でも殺しはしない、殺してなんかやるものか。

「お前には生きながらの地獄に落ちて貰う。恨むのならば、貴様の
己の愚かなる生き様を恨むのだな。」

淡々とした、凍てついた声で紡ぐは、生き地獄への誘いの言の葉。
その私の言葉に返る男の声はない。

それはそうだろう。

男はあまりの恐怖に、既に失神していたのだから。

この時から私は既に、【血に濡れた魔女伯】としての片鱗を見せていたのだと、後に人から伝え聞いた。

偽りの領地？（前書き）

更新。

偽りの領地？

血に濡れしは、望まれぬ戦姫。

守られし者は、暁の聖なる乙女姫。

求められしは、闇を打ち払う聖少女。

歴史は語る。

血に濡れしモノには、『死』なる正義の裁きを、と。

「無様だな。」

失神し、縄で身体を縛られ、シユリによって監禁専用部屋に連行された男の行く末は、もはや救いも望めない、生きながらの地獄。

民からは、なけなしの血税を啜るだけ啜り、貪り尽くし、更に富を得ようとした狡猾な獣。

その狡猾な獣は、瞳は濁り、身体は肥え、声には奢りと嘲りしかなかった。

それで領主とは、呆れ果て、笑いも出て来ない。

あの男を殺してしまいたいと思い、願う人々がいるのは十分知っている。でも、その通りにあの男を斬頭題の露として処刑しまうのでは、割に合わない。

革張りの椅子に座れば、ギシリ、と、音を立て、布が沈む。

その椅子に座り、机の上に置いたのは、持参してきた高級な羊皮紙。その羊皮紙の上に、インクを浸した羽根ペンのペン先を走らせ、書いているのは、新しい辞令書。

それを見て思うのは、良くこの短期間で、ここまで字が書けるようになったな、と、言う事。

私を自分の娘として、伯爵家の人間を騙せと命じた男や、その家族達は、命じておきながら、私に一切の教育を施さなかった。そればかりか、嫁ぎ先の情報さえよこさない。

きつと、偽りの期間が終えたのなら、私は秘密を知っている邪魔者として、秘密裏に殺されるなりなんなりして、始末されるのだろう。

（そうになったら、あの方は泣いて下さるだろうか。）

と、我ながら厚かましい事を考えてしまい、苦笑が漏れる。

私が令嬢になっている事も、罪と知りながら、こんな事に手を染めているのも、あの高貴なる人は知らない。

あの人は、自分で貴族だとは一言も言わなかったが、立ち居振る舞いが綺麗で、話し方も緩やかでいて丁寧だったので、言われなくとも判ってしまった。

その人に初めて会った時に、「名前は？」と聞かれた時、私は自分の名前が答えられなかった。

それもそうだろう。

何しろ、物心がつくかつかない頃には、既に貧民街の一員だった私は、名前を付けて貰った記憶も、優しく名前を呼ばれた記憶もなかったのだから。

その事を、嘘・偽りなく告げたのなら、あの人は私を連れ、小さな聖堂に連れて行き、洗礼を受けさせてくれた。

——君の洗礼名は『ファナ』だ。そして、君の君だけの特別な呼び名は……。

私がつも一つの名前を思い出し掛けた時、その声は聞こえた。

「奥方様、如何なされました？」

【……っ、い、いえ、なんでもないわ。】

一体、何時からそこにいたのだろうか。

私は驚きのあまり、自分が異国語で話している事にも気付かず、急いで笑みを浮かべた。

私に声を掛けてきたのは、この腐敗しきつたイルファードールにおいて、唯一、主家たるエディエス家に忠誠を誓い、この領主館をギリギリの所で守り、整え、危険を承知の上で嘆願書を届くようにした、老執事のセドリック・ジャクソン氏。

「そうですか？なら奥方様、一つお尋ねしてもよろしいでしょうか」

良いでしょうか、と、聞きながら、彼は既に、もう聞く事を決め

ていた。

私は面倒だと思いながらも、笑顔で頷いた。

「奥方様におかれましては、いつから当屋敷の庭を好きになって頂けたのでしょうか。」

【・・・っ、】

迂闊だった。

あの令嬢は如何にも草や花、小鳥と言った自然より、ドレスや宝石等と言った贅沢なモノを好む性質で、現に、あの令嬢の頭の中には、贅沢をするコトしかない。

王都を離れ、少し油断していたのかもしれない。

でも。

私は焦る内心を綺麗に押し隠し、微笑んだ。

【ヒトは変わるものよ？セドリック。貴方も、私も、否応なくね。】

何を考えているのか、画策しているのか、何も窺えない笑顔。

その笑みを浮かべた私を、数秒だけ見つめ、セドリックは深い溜息を吐いた。

その態度に、どうやら今回の処は私に勝ちを譲ってくれる気になつてくれたらしいコトに気付いた。

私はそれに安堵し、ここぞとばかりに、止めを刺した。

【ああ、それからね、セドリック。】

につこり、と、音がしそうな笑みで。

【私がこの領主を止めさせたこと、旦那様には言わないでくれる？表向きは失踪にでもするから。それと、私の食事は作らなくても良いから、民に還元なさい。——飢えているのでしょうか？】

誰がとは言わない。

それに今日からは養う人間も増えるし、第一、食べたって味が判らない上に、貴族の食事は不健康に見え、口に合わない。

私が二・三言いつけると、セドリックは深く頭を下げ、執務室に来た時同様、気配なく出て行った。

それを見送ってから、私も無意識に詰めていたをたっぷりと吐いた。

心が休まらないのは、辛く、厳しい。

せめてもの慰めは、これがある事。

シャラリ、と、耳元で繊細な音を立て、揺れる耳飾りと、髪を飾る飾り。

【やり遂げてみせる……。】

その二つに勇気づけられるように、私は一人で呟いていた。

偽りの領地？（前書き）

更新しました。

偽りの領地？

こんなにもココが疲弊していたなんて。

サラリと私の小さな掌から落ちる、嘗ては肥沃だったのだろうイ
ルファードルの恵みの素は、今や荒野同然となり、目の前の大地に
広がっている。

ボソボソな畑の土は養分がなさそうで、しかも、見るからに水捌
けが悪そうだ。

「これがルードベルク王国の食糧庫の現状だと言っの・・・？」

あまりの惨状に、くつくつと笑いが込み上げてくる。

「ふざけるな、セドリック！！」

ジャリツ、と握った土を、傍に立って控えていた老執事に投掛け
る。

私は視察と称し、朝早くから起き、乗馬服に着替え、私を制止し
ようとする使用人達を振り切つて馬に跨り、領主館に程近い農地に
駆けつけてみれば、民は疲弊し、肥沃な大地は痩せ果て、荒れてい
た。

「子供は、女達は何をしてる？」

その痩せ果て、荒れている農地で、それでも必死に生きようと、
命を繋ぐようと懸命に働いているのは、年老いた老人か、無益な賦役

で疲れ果てている男達だけ。

「このままでは、この地は新しい年を迎えられない。」

もつと悪ければ、本来は王家に納めるべき収益金や麦も取れないかもしれない。

いや、収益金はあの男が貯め込んでいた貴金属でどうにかなるだろう。

しかし、それではあの男の下で、長年の庄政に苦しみ、悲しみ続けてきた民は救われない。

「何をやっている！！このままでは本当にこの地は終わると言うのに。女も働かせろ。そうでなければ飢え死にするぞ！！」

土を掛けられても、微動だにも動かない老執事の胸座をつかみ、突き放す。

食べ物が無い侘しさやひもじさは、相当な苦しみや恨みを生みだす。

もし、このままこの民が餓えれば、やがてそれは暴動へと繋がり、罪もなき者たちの多くの血が流れる事に繋がる。

その時、私の頭に真っ先に浮かんだのは……。

（そんな事は、させない。）

乗馬用の鞭を、力の限りギリギリと握りしめ、唇を噛み、私は覚

悟を決めた。

「セドリツク、お前にはやって貰いたい事がある。やって貰えるな？」

これはもはや頼みでもない。ただの傲慢なる命令だ。
拒否は許さない。

その意を込めた眼差しをセドリツクに向ければ、彼は私に恭しく頭を下げた。

「過去10年間に遡ってのこの領地の収支記録と天候、王家へと献上した品物と報告した書類を出来るだけ集める。そして職業訓練場の建設と誰でも利用できる学舎と医療機関を創りたい。人を集められるか？」

報酬は現物支給だ」

これは応急処置でしかない。

荒れた荒野を回復させるにも時間はかかるし、かといって、新しい事をするにも時間はかかる。

報酬でもある現物（食糧）も、無尽蔵ではない。

それでもやらなければならない。

その私の決意を見抜いたのか、老執事は膝をつき、頭を垂れた。

「全ては、仰せのままに、——我が君。これより先、私、セドリツ

ク・ユイ・ジャクソンは、貴女様に命ある限り、誠心誠意お仕え申し上げます。」

それは、物語やお伽噺に出てくるような、立派な口上で、完璧な恭順の礼だった。

迷ったのはほんの僅か。

今も頭を垂れている老執事に手を差し出し、私は一つの単語を發した。

「アイリーン・ファナルだ。いや、よ、か。」

私のその苦笑交じりの言葉に、彼は全てを察し、何かを感じ取ったようだった。

事実、彼は後世次のように語っている。

——魔女伯様の悪知恵と企みには、誰も敵いませぬ。流石は我が君。

と。

偽りの領地？（後書き）

動き出すまでが長いぞ。

恋愛要素はまだ微塵も出てきてませんが、ご容赦を。

偽りの領主？（前書き）

愛って、なんですか・・・？

偽りの領主？

私の傲慢な命令で、セドリックによって即座に即座に集められた女達は、私の予想していた通り、日焼けの一つもしていなかった。

それどころか。

（これで良く今まで持ったな・・・。）

白く生っ白い、生気を感じられない女もいれば、明かに肥え過ぎた女も数人いた。

いくら見かけだけで人を判断してはならないと言われてはいても、こつも違いが出ているとは。

思わず重い溜息が出てしまう。

「貴女達は今まで何をしてきたの？子育て？家事？いいえ、違うわ」
いつの間にか傍に控えていた侍女（馬車で追いかけてきたともいう）に、答えるように促せば、私のその横柄な態度に憤りながらも、侍女は答えた。

その隣では、シュリが珍しく嘲笑の笑みをアイスブルーの瞳に浮かべていた。

シュリには判っていたのだろう。

侍女が述べた言葉が、私が求めている答えではない事を。

「貴女達は何もしようとしなかった。いえ、しなかったのよ。耳を閉ざし、口を閉ざし、目をも閉ざし、何もしようとしなかった。料理と掃除、洗濯、子育てさえしていれば女と言える?」

コツリと、女達の前に歩を進める。

決して見縊られない様に、侮られないように。

それどころか、憎まれるかのように、高飛車で、高慢な支配者を演じるかのように。

「笑わせてくれるわ。そんな男だって出来るわよ。ねえ、セドリツク」

「はい。」

私に忠誠を誓ったばかりだと言うのに、老執事は私の言葉にすぐさま頷いてくれた。

私はそれに勇気を得て、びゅんっと、鞭を撓らせ、女達に命じた。

「昨日からここイルファードルの領主は私です。よって、貴女達はおるか、ここの領民は全て昨日からこの私に従う義務が発生しました。」

私はこれから修羅の道を歩むことになるのだろう。

だけど、もうこれは決めたことなのだから。

「本日ただ今を持ち、貴女方女性陣にも外で働いて貰います。逆らうのは許しません。今やイルファードルは破綻寸前。働かない者に

は飢えて死んで貰います。」

私の命令に、女達は惑い、逆らう人間もいた。

当然私はその者には一切の情けも掛けず、結果、その女は呆気なく死んだ。

「土地を修めるのは慈善では出来やしないのよ。貴方達の税金を貰う代わりに、私達は自分の身を売り、望んでもない家に入り、子を成し、平和を勝ち取る為、腹を探り合っているのよ。命を削りながらね。」

涙を流し、悲しみに暮れる家族を前にしても、私は感情を表には出さなかった。

その代りにその家族には三日の休日を許可した。

「判りにくい優しさですね……。」

その私の判断に、セドリックはそう苦笑を洩らした。

後日、私の打ち出した計画がその当時としては非常に異端だったらしく、それと共に、命令に逆らった者に情けを掛けなかった事が一緒にになり、イルファードルには一つの噂が実しやかに流れた。

セドリック曰く。

——あの女領主は、血も涙もない、恐ろしい魔女の様な血を好む独裁者だ……。

と。

当然このような醜聞は、即座に王都にいる王家や、名前だけの夫の耳にも届いた。

そしてそれが切っ掛けとなったのか、その召喚状が届いたのは、丁度イルファードルの新しい収支報告書が出来上がり、軍規を整え終えた日だった。

「ふん、何処にもネズミはいるんだな・・・。」

「そのネズミはどんなされます・・・？」

シユリのねつとりとした甘い声に、私は嗤った。

その笑みを見た哀れな羊は蒼くなり、その場に倒れた。

倒れたのは、国と国王を守るべく名誉ある近衛騎士。

（これがこの国を守っている騎士か・・・。）

情けないのも程がある。

このような人間が強いというのなら、この国は案外脆いのかも知れない。

でも今はそのような事を案じている暇はない。

私は召喚状が届いたその日の内に、セドリックとすっかり傷の癒えた獅子とシユリだけを連れ、僅かな金子と報告書だけを持ち、1

0日を掛け、王都へと戻った。

そこで、あの人と再会する事も知らずに・・・。

だけどこの事が無ければ、私は恋を知らずに死んでいたのかもしれない。

そう思ったのは、恋心を知った日の翌朝の事・・・。

偽りの領主？（後書き）

だいぶ変わりましたね。

でも、こうでもしなきゃ、話は繋がらないので。

偽りの領主？（前書き）

更新

偽りの領主？

「此方でお待ち下さい。」

王都につき、婚家であるエディエス家にも挨拶をせずに向かった王宮。

その王宮に着き、私が馬車から降りるなり案内されたのは、無駄に派手な、いわゆる【謁見の間】だった。

私を案内してくれたのは、見た目はそれなりに整っている青年で、立ち居振る舞いから貴族の子弟である事が容易に察せられた。

その青年を気にしながらも。

『・・・、ここが、この国の中心ですか・・・？』

私の後を無言で着いて来た片眼の男は、通された部屋にいささか戸惑っていた。

それもそうだろう。

何しろ、動けるようになるまで静養していたあの地の現状を知って、見て、聴いている者ならば、この王宮は異様過ぎる。

多かれ少なかれ、他の領地も似たようなものだとするのならば、尚更に。

『無知とは罪だと、サヤコも言うてはありましたが・・・。』

『貴方の奥方は賢いわね』

『いや、彼女は・・・』

反論しようとした彼を瞳で制止し、ドレスの裾を軽く持ち、頭を玉座に向かって深々と下げた。

それに伴い、私の背後に控えていたセドリック、シュリ、傷の癒えた男も私に習い、それぞれ頭を垂れた。

その最中に向けられる視線の多くは、奇異や侮蔑、妬みや嫉みの類だった。

でも、その中には、私がなぜ今ここにいるのかを判っていて、女のクセに政治に口を挟むな、と言う、明かに女を卑下しているモノもあり、実際、そのような言葉も聞こえた。

でも。

（ああ、貴方もそうなんだ・・・。）

その最たる人物が、仮にも夫である男性というのが実に滑稽で皮肉だった。

（何も知らぬ、知ろうともしない愚かな人間どもめ・・・。）

今、私がこうしている間にも、何処かで、一人、また一人と、暗い絶望の中で命を落としているというのに。

——ぎりっ、

唇を噛めば、ほのかに鉄の味が口の中に広がった。

でも、それは私が身に纏った黒いレースのヴェールによって、他の人達には判らない。

だが、唯一、後ろに控えていた屈強な男だけは気付いたようだが、彼は私の気配を読んだのか、何もなかったかのように振る舞った。

（流石は雷光の獅子。）

ヴェールの奥でほくそ笑んでいれば、「頭を上げよ」と、声が聞こえてきた。

その言葉通りに頭を上げ、ヴェール越しに玉座を見れば、一人の男が王妃らしき女性と一緒に座っていた。

女性は国王に甘えるように寄り添い、国王は国王で、何を考えているのが全く判らなかった。

でも、今はそれを気にしているような時ではない。一刻も早く現状を訴え、再び彼の地へ戻らなければならない。

再び、優雅に見えるように礼をし、言葉を発する。

「お初にお目にかかります。エディエス伯爵がイルファードルの領主、ローザにございます。此度は私の様な一領主の為、陛下の貴重なる時間を格別に割いていただき、まことにありがとうございます。」

いったんそこで言葉を区切り、手はず通りにセドリックに視線をやれば、老執事は悲痛な面で目を伏せ、国王の側近に歩み寄り、仕上げたばかりの報告書を渡し、私の背後に控えた。

私は国王がそれに目を通すまで、無言を通した。

やがて、数分が経ち。

「これは・・・っ、」

国王の驚愕の声が聴こえてきた。

「これは・・・っ、真の事なのか・・・？ 真実、嘘偽りのない事実なのか？ イルファードルの領主よ」

（かかった！！）

今、国王は私の事をイルファードルの領主と呼んだ。

それに自信を得た私ははつきりとした声で、それでも悲痛な思いを抱かせる為、声を作った。

「――残念ながら、事実にございます。陛下。」

深く頭を下げ、顔を上げる。

だが、顔はヴェールで隠れていて見えない。

「イルファードルは今や過去の遺物と成り下がり、領地は荒れ果て、

民は我ら王侯貴族を嫌悪しております。ですが、彼らは私を信じてくれると言ってくれました。いくら伯爵家に訴えても、伯爵家の人間は来てくれなかったけど、私だけは違うと。私はそんな民達の為にも、イルファードールの領主として、イルファードールを復興させたいのです。それが私の出来うる陛下への忠誠の表し方でございます。

「

嘘も方便。

私の偽りと本音が入り混じった発言に衝撃を受けたのか、謁見の間は水を打ったかのように静まり返った。

音一つたたない、異様な空間。

（信じたくなければ、信じなければいい。）

けど、その先にあるのは。

短くも長い沈黙の時を破ったのは、国を治める長としての責任を誰よりも持っている国王だった。

「——よろう。余はそなたを信じよう。イルファードールの領主・白銀の魔女伯殿。イルファードールの領民、兼ねてはこの国民を助けてくれ。イルファードールの軍権、法などの全ては、本日これより、魔女伯に一時的に譲渡する。」

この時、私は快心の笑みを浮かべていた。

それを察したのは、やはり、後ろに控えている男だけだった。

その笑みを気取られぬように、私は三度、頭を下げた。

「——ありがとうございます。このご恩は必ずお返しにあがります。
——ガイエン、陛下に剣を。」

今まで、ずっと黙って私を護衛していた片眼の騎士に声を掛ければ、その騎士は、迷いも躊躇いもなく、帯剣していた長剣を掲げ、膝を着いた。

そして。

「シルティア国軍は元は將軍、ガイエン・フォスターにございます。
有事の際はお呼び下さい。我が君が貴方様に従うのなら、俺も従い
ましょう。」

厳つくも、男らしいガイエンの言葉に、謁見の間は驚きの色に染まった。

偽りの領主？（後書き）

雷光の獅子・ガイエン。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3452y/>

Eine Blume ist ein Garten zu bl?hen

2011年12月20日20時57分発行